姫君の結婚

三ツ橋よしみ

桜の頃に、千葉の「いすみ鉄道」に乗りに行った。

「いすみ鉄道」は上総中野駅から大原駅まで、全 14 駅、全長 26.8ｋｍの、第三セクター運営の鉄道である。ワンマン運転で一両編成、カーブが多くせいか、車両が古いためなのか、車体は大きく揺れながら走る。

沿線は、桜、桃、菜の花、新緑にみちていた。水ぬるむ田には青空が映り、雲が次々と走り過ぎた。ふだんは目にもとめない踏切の点滅する赤い警報ランプや、黄色と黒色の遮断機までもが、満開の春の色どりに見えた。

パラパラと家々が現れると、小さな駅に着く。舞い散る桜と、ゆれる菜の花の黄色い群れのうしろに、色あせたホームの看板や、サビた鉄のフェンスがつつましく控えていた。心地よい光景だ。

いすみ鉄道には「大多喜」という駅がある。

その駅を出て 15 分ほど坂をのぼると「大多喜城」に出る。昭和５０年に復元された鉄筋コンクリート、３層４階の城で、今は千葉県中央博物館の大多喜分室になっている。

大多喜には近世、里見氏の城があったが、徳川家康が関東を治めるようにな

った、1590（天正 18）年に、家臣の本多忠勝が初代大多喜藩 10 万石の藩主に封じられた。

城内の博物館には、古地図や古文書、鎧かぶとなどの歴史資料の展示があった。大多喜城初代城主、本多忠勝の系図が掲げられてあった。その中で目を引くのが、本多忠勝の孫の忠刻（ただとき）が、千姫と結婚していることであった。千姫様の名を千葉の大多喜で目にするとは、思いもかけないことだった。

後日、調べると次のようなことだった。

２代将軍徳川秀忠の長女千姫は、７歳の時に 11 歳の豊臣秀頼に嫁ぎ大坂城に入った。1601（慶長６）年、大坂夏の陣で夫秀頼が自刃した際、家康の命で救い出された。千姫はまだ 18 歳だった。

こんどは幸せになってほしいと選ばれたのが、家康の重臣であった本多忠勝の孫、眉目秀麗で評判の忠刻 22 歳であった。そのとき本多家は大多喜藩から転封され、伊勢桑名にあった。20 歳になった千姫は桑名城に再嫁したのだ。本多家は翌年、姫路藩に移封されたため、姫路城に移り住んだ千姫は、播磨姫君とよばれるようになった。

千姫は不運だった。忠刻との間に長女の勝姫、長男幸千代をもうけたが、長男は３歳でなくなり、夫の忠刻は３１歳で病死してしまったのだ。

２９歳になった千姫は勝姫を連れて江戸にもどり、落飾して天樹院となった。

一人娘の成長を楽しみに過ごし、７０歳で亡くなった。

千葉の桜を見に行き、思いもかけず、千姫様の運命を知ることとなった。大多喜城は復元された城で、歴史を感じさせる建物ではないが、４階の天守に登ると、周囲の集落、田畑や川が見下ろせる。この眺めは江戸の頃からも変わらないだろうと思う。

戦国の世を駆け抜けた徳川家康、本多忠勝、運命に翻弄された千姫様、いまは歴史となってしまった人々だったが、彼らの息遣いが、千葉の大多喜城から垣間見えた。

お城を後にして、坂を下る。道路わきの桜が散り始めていた。